

---

# 白銀の雫

栖坂月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白銀の雫

### 【コード】

N9886P

### 【作者名】

栖坂月

### 【あらすじ】

とある霊峰の麓に小さな国があった。そこには『白銀の雫』という国を繁栄させる宝があると伝えられていた。皇帝は自らの国を憂い、その宝を欲する。それが何であるのかすら、知らぬままに。

(前書き)

何と言いますか、私個人としては地味なまま終わってしまった仮面舞踏会だったので、投稿作はこっそり上げておこうと思います。一月は少しばかり充電期間におきたいので、あまり気負って書かずにのんびりさせていたたくつもりです。

もう読んでしまわれた方はスルー推奨です(笑)

唯一に等しい交通手段である橋の占拠により始まった帝国軍の侵攻は速やかに、かつ雷撃のような鋭さを伴って王都へと一気に到達した。本来帝国の強みであり、最も優位な条件である筈の大規模戦力による行軍を行わず、精鋭による拠点制圧に特化したことが、王国軍にとって大きな誤算であったことは間違いない。

しかし直接の、端的な結果論としての敗因を一つ挙げるとするならば、兆候すら見せないままに不意を討ち、それまでの良好かつ安定した関係を嘲笑うかのような狡猾さこそが選ばれて然るべきだろう。だが王城に迫り、引くか守るかの選択肢を突きつけつつあった帝国軍は、それまで止まる気配すらなかった侵攻を不自然なほど急激に停止させ、停戦交渉の使者を送りつけてきた。未だ迎撃の準備すら満足に整っていない王国軍としては、圧倒的優位にある状況下での申し出に眉根を寄せながらも、一縷の望みを託してすがりつく以外の選択肢は残されていなかった。

「お初にお目にかかる、神麓しんれいの女王よ」

帝国を象徴する深紅のマントを背負い、未だ若い皇帝は口火を切る。互いに五分五分の条件という名目で開かれた交渉の席に、上座は存在しない。本来なら謁見を行う場である大広間の玉座は、主の帰りを待つ飼犬のように大人しく佇んでいた。

「ようこそおいで下さいました、皇帝陛下」

いつもなら主が座っている玉座から見て右手に並ぶ王国軍の面々は、誰もがその顔に苦渋と困惑を浮かべている。ただ一人、その中央にいる新緑のドレスに身を包んだ女性、神麓の女王と呼ばれた彼女だけが、物怖じすることなく深々と頭を下げているのが印象的であった。ちなみに神麓というのは、この国の中核を成し象徴でもある霊峰『カミツナ』の麓に暮らす民のことを指す俗語である。この王国はその存在自体が一つの宗教組織に近く、限られた土地で細々

と暮らすこと自体を教義として掲げていた。

「噂には聞いていたが、なかなか見目麗しいお姿だな。民が慕うのもわかる」

「ありがとうございます」

皇帝の言葉に害意を察した大臣が口を挟むより早く、女王は眉一つ動かさずに、それでいながら優雅に謝意を述べた。事実、この地方には珍しい漆黒の艶やかな髪と瞳は、カミヅナから見下ろす夜景に例えられるほどに有名である。それらが更に、高貴さを演出する白い肌との間に大きなコントラストを生み、より鮮やかな印象を伴って脳裏に刻まれる。まだ目立った実績のない、即位して二年に満たない十代の女王ではあったが、王国内はもちろん隣国である帝国にまで届くほどにその端麗な容姿と二つ名は売れていた。

「……なるほど、ただの小娘でないことは間違いないようだ」

挑発を受け流されて、それが予想に反していたことが嬉しかったのか、皇帝が口元に歪んだ笑みを浮かべる。もつともそんな言葉を口にする彼とて、どこか口髭が浮いて見える三十路の若輩皇帝である。その鮮やかなプラチナブロードから『白狼』の異名を冠しているが、彼の代になって周辺国とのイザコザが微増していることも事実だった。無論、それを力で捻じ伏せるだけの実力を有していることも、近年になって証明されつつあるのだが。

「とりあえず座らせていただけじゃないか？ こちらは行軍の長旅で疲れているものでね」

「これは失礼しました。どうぞ遠慮なくお掛け下さい」

招いてもいないのに土足で踏み込んできた者の身勝手な台詞にすら、彼女の笑みは全く崩れない。それは穏やかな、相手を労う心遣いを明確に感じさせたまま、全てを包み込むような寛大さを持ち合わせているように見えた。あるいは本当に腹を立てていないのではないか、帝国軍の何人かがそんな風に感じたほどである。

「さてと」

互いの軍勢が向かい合って座り終えたところで、皇帝が待ってい

たとばかりに口を開く。

「こちらとしてはあまりのんびりと世間話をしていられるほどの時間はない。早速交渉に移らせてもらいたいのだが、まずは一つ伝えておかねばならないことがある」

顔の前で手を組んだ皇帝は、自分の口元を隠すかのような姿勢で女王を見据える。その眼差しは、さながら上空から獲物を探す鷹の目の如き鋭さを有している。しかしそのような、常人であれば目を合わせることもすら出来ずに萎縮してしまいそんな視線を浴びてさえ、奥深い闇を映し出す漆黒の瞳に揺らぎは見えなかった。

「あの騎士、名前は何と言ったか……そうそう、ハガネと名乗っていたな。彼の命はまだ消えてはおらんよ」

この瞬間、王国軍に走る動揺に隠されてはいたものの、それまで一切の個人的感情を排していた女王の仮面に、僅かな変化が表れる。彼女は少しだけ目を見開き、一瞬だけ下唇を噛んでから、一度目蓋を閉じて細く長く息を吐いた後、少女の素顔を仮面で隠した。

「もちろん、我が行く手を遮った咎人である以上、客人としてもてなしているとも言えないがね。この国の戦士は蛮勇に過ぎるな。牢に入れておかねば、まともに対話することもままならないのだから」

王国軍から忍び笑いが漏れる。かの騎士の勇猛ぶりは王国内でも有名だ。それはもちろん子供頃から慕い、専属の騎士に実力で成り上がってまで傍に居ようとした彼だからこそ納得されるものだ。

二人の関係も含め、王国はこの若い女王を温かく見守っているのである。

「それで、だ。率直に言つて余はこの国の土地にも民にも興味はない。今回の侵攻も、そちらが不穏当な越境行為を行ったからであり、その非を認めればこれ以上の侵攻を行つて民を犠牲にするつもりもない」

このあまりに理不尽な、あるいは身勝手な言い分に、幾人かの臣下が椅子を鳴らして立ち上がる。しかし怒りの言葉は、女王の広げた右手によって制止された。まだ若い彼女だが、身に纏った風格で

は若い皇帝に引けをとることはない。とはいえ納得も受諾も出来ない思いを抱えて我慢するしかない面々は、その溜まっていく苦い怒りを奥歯で噛み締めながら、眉根に皺を寄せて黙り込むことしか出来なかった。

「では皇帝陛下、貴方は何を望むのですか？」

帝国が、ただ抗議を行うために正規軍の精鋭を動かすことなど有り得ない。相応の目的、すなわちこの王国内にある何かを得るための行軍であることは自明の理であろう。

「美しいばかりか利発な女性だな。しかし良いのか。建前とはいえ抗議の一つくらいはしておかねば、一国の主としての体面も保つてはいられない？」

「それで国が救われるなら、いくらでも」

その落ち着きが気に入らないのか、皇帝は鼻を鳴らす。

「つまり、敗北を認めるとのことだな？」

「民にとって重要なのは、国の未来であり現在の生活です。陛下の行軍は止まりました。必要のない戦に民を迷わせる訳にはまいりません。私達にとってはもう、終わったことなのですから」

「良い心掛けだが、全てを奪われて尚その言葉を吐けるかな？ 例えは今、余がこの場で神麓の女王、すなわち貴女を欲したら、それに応じる覚悟があるのか？」

「貴様つ、幾ら何でもそんな要求が」

隣で吼える大臣を視線で制し、強い眼差しをそのまま皇帝へと向ける。

「私の身で民が救われるというのなら、喜んで差し出しましょう。しかしそれにはまず、明確な保障を確約する文書の作成と調印がなければ」

「いや悪かった」

皇帝の短い謝罪とその口元に浮かぶ浅い笑みが、からかいの言葉であることを如実に物語っている。それまで辛うじてながら崩さずにいた仮面が、歳相応の少女らしい感性によって若干ながら剥が

されたことを悟り、女王は初めて眉間に皺を寄せた。

「神麓の女王よ、余は新しい妾を探しにこんな辺境まで足を運んだのではない。我が望みは唯一つ、白銀の雫だけだ」

「白銀の雫……」

「知らぬとは言わせんぞ。国の繁栄をもたらす秘宝、それさえ手に入れば我が軍は速やかに退散させてもらう。どうだ。悪い条件ではあるまい？」

王国軍の面々が顔を見合わせている。戸惑っているとも、困惑しているとも取れる態度だ。しかしその中心にいる女王は、しばらく目を閉じて何やら考えた後、迷いのない眼差しを皇帝へと向けた。

「わかりました。お渡ししましょう」

この言葉にどよめきの声を上げたのは、王国軍の方だった。

分からないという結論を、帝国側も認めざるを得なかった。当初出し渋っているという疑いから、王城の宝物庫はもちろん城下町の倉庫に至るまで虱潰しに調査を行ったのだが、白銀の雫と思しき宝玉を発見することは出来なかった。結果、共同で書簡庫から文献を漁り、その正体と所在を明らかにしようという計画が持ち上がることとなる。作業のほとんどは王国の学者を中心に行われ、帝国軍はその監視に当たるといのが基本的なスタンスとなっていた。そんな折、城外から奇妙な噂が舞い込んできた。

「陛下、いかがなさいますか？」

いつも通りの無表情で尋ねる女王からは、他意と呼べる思惑は浮かんでこない。そこにどのような意図が介在しているにせよ、彼女が真顔でこのような話を持ってきたこと自体が、皇帝にとっては興味深く滑稽に思えてならない。

「そんな話は出鱈目に決まっておろうが！」

生真面目な近衛隊長が、まるで家族を愚弄でもされたかのような強面で断じる。もちろん皇帝としても、単純な見解としては彼に同意するところだ。しかしそれ以上に、彼は目前で涼しい顔をしてい

る女王の胸中が気になった。

「そこに在ると思うか？」

「陛下っ！」

山の頂に向かつて流れる川があるとでも言われたような顔を、近衛隊長は皇帝に向ける。即位する前からの長い付き合いだ、時折大事な局面で遊びに走るのが、彼の主の悪い癖でもあった。もちろん、そのせいで陥った危機から救ってきたのは、彼の功績となっている。

「わかりませんが、文献の整理には今しばらくの時間が必要です。その合間に確かめる程度であれば、特に支障もないかと」

この聡明な女王が、カミツナの中腹を根城にしている山賊が白銀の雫を隠しているらしい、などという子供染みた話を本気で信じているとは、流石に皇帝も考えていない。しかしなればこそ、何のために彼のところまでこの話を持ってきたのか、その真意が分からなかった。

「貴様、その為に我が軍を貸せと言うのではあるまいな？」

近衛隊長の疑問は理に適ったものだ。戦力を他へ動かし、手薄になったところへ刺客を差し向ける、ある程度の戦乱を経験すれば当然ながら生ずる発想でもある。しかしそれをするにはあまりに見え透いているし、伝え聞いた、あるいは直接見た上での彼女の印象とあまりにもかけ離れている、少なくとも皇帝にはそう思えた。

「もちろん我が軍で処理致します。もちろん、ご許可をいただければ、の話ですが」

断るに明確な理由を失い、近衛隊長も皇帝へと目を向ける。その顔がかつて街中で捨て犬を拾ってきた時のものと酷似して見え、つい吹き出してしまふ。

「何が可笑しいのです？」

「いやすまん。何でもない。そうだな、胡散臭い話ではあるが、こちらの要求と合致している以上捨て置く訳にもいくまい。文献の調査が進んでいないことも事実だしな。ただし」

言葉を切り、鋭い眼差しで女王を見据え、ニヤリと笑う。

「余も同行する。もちろん女王、其方もな」そなた

渋るかと思つていた返しに、女王はすんなりと、まるで用意していたような恭しさを伴つて頭を下げた。

かくして山賊の討伐計画が発令され、その僅か三日後には準備が整い、国を代表する二人の男女は連れ立って王城を後にした。町を抜け、聖域である山道へと入り、途中で脇に逸れて神の住まう山を回りこむ。やがて目的地である根城が視界に入ってきたところで、急ごしらえとしか思えない簡素な砦に到着した。

「こんな所に砦があるとは、随分と用意が良いのだな？」

「はい、討伐の決定から急いで建ててもらつたものです」

女王の即答に、皇帝は感心したように天井を見上げる。

「ほう、だとしたら大したものだ」

切り出した丸太を組み合わせ、蔦と金具を使って固定してあるだけのものだ。砦と呼ぶにはいささか堅牢さに欠けるものの、山賊討伐の前線基地としては十分な代物と言えた。しかもそれが足場の悪い山地に、たった三日という期間での完成を見たのだとするなら、築城の速度は驚くほど速いと言えるだろう。無論、この一例のみで質の高低までの判断出来かねるところだが。

「それでは陛下、早速始めたいと思つのですが」

「そうだな。そうしてもらおう」

皇帝の同意を得て簡潔に指示を飛ばし、簡易的な木製の盾と帝国の正規品である短刀で身を固めた、正規軍と呼ぶにはあまりに軽装な討伐部隊が動き始める。反乱や暴動という疑いを持たれない為に王国軍は自軍の武装を押さえられているのだ。今回の軽装ですら借り物に過ぎない。仕方がないとはいえ、このような万全とは言えない形で討伐に送り出すことになったことが心苦しいのか、物見台へと向かう女王の表情は珍しく明確に曇っていた。

「険しいな」

「え、あつはい、ここは滅多に人の足が入らない場所ですから」

「そうではない」

高台に到達して風を浴びると、一際空の青さが間近に見える。皇帝は不安げな女王に向けて笑みを浮かべると、丸太そのものの手すりに手をかけて言葉を続けた。

「其方の顔が険しいと言ったのだ。やはり心配か？」

「当然です。民の身を案じない王など、何の価値がありませんか」  
「なるほど、だがこれで白銀の雫が手に入れば我らの呪縛から解放される。念願を手にする条件としては、かなり分の良い勝負であると思うがな？」

まだ若い女王に、命を数で論ずるのは抵抗がある。皇帝がそうせざるを得ない立場にあることも頭では理解しているが、それでもやはり湧き上がる嫌悪感までは隠し切れない。ただ同時に、別の疑問が浮かび上がってきたことを彼女は見逃さなかった。

「……陛下、一つお聞きしても宜しいですか？」

山間部への遠征ということで、二人の服装はいつもの正装と違いラフな格好をしている。彼女に至っては町娘と大差のない姿ですらある。しかし今、皇帝へと向けられた淀みのない眼差しは、紛れもなく一国の女王たる女性のそれだった。

「申してみよ」

「陛下は、どうして白銀の雫を求めるのですか？」

「随分と今更な質問だな。国の繁栄のためと言った筈だ」

「ならば国へ帰り、その為の具体的な方策に身を投ずるべきでしょう。むしろ本来の陛下なら、そうなさっているように思います。少なくとも得体の知れない、在るのか無いのかすら定かではない迷信に頼らねばならないほど、施政にお困りとも思えません」

「ハッキリと言ってくれるわ。これでも政には苦労していると思うぞ。戦場で指揮を執っている方が、幾分は気が楽だな」

抗議の言葉を並べつつも、皇帝の口調は軽い。

「同じ結論へと至る二つの道があった時、陛下は間違はなく、困難なれど確実な道を選択される筈です。安易なれど曖昧な道など、望

んではおられないでしょうか？」

「確かに。しかしだからこそ、余には白銀の雫が必要なのだ」

「どういう意味です？」

「帝国には信仰がない。それは悪いことばかりではないが、明確に信ずる何かに欠けるといふのは、特に遠征において士気の低下を招く要因となるのだ。金や麦だけで民は動かない。その何かを余は欲している」

「白銀の雫は、戦争の道具ではありませんよ？」

「だろうな。だが、民を惹きつけて離さない何かしらの魅力を備えていることも確かだ。どう使うかは、余が決めるさ」

立ち昇る雄叫びを背景に、皇帝が口元に歪んだ笑みを浮かべる。

その様は自らの歩いてきた道程を誇るかのような、ある種の自信に満ち溢れていた。

当然のように白銀の雫が見付からないまま、一週間という時間が経過した。ただ何一つ収穫のない状況が続いたのではなく、文献の検証を行っていたチームから白銀の雫に関する記述が二つ発見されている。その一つ、すでに閉鎖された廃坑には調査員が向かっており、本格的な搜索が昨日より開始されている。そして今日、もう一つの現場で調査が開始されようとしていた。

「ほほう、なるほど良く見える」

王城の片隅にある塔の最上階に案内された皇帝は、起伏の激しい大地と沿うように張り巡らされた二つの砦、そしてその向こうに見える岩場と大河を見つけて歓声を上げた。

「この城で最も高い場所です。天気が良いければ、帝国まで見ることも出来ますよ」

「確かにこれならそうだろうな。それにしても」

言いつつ視界を少しだけ右へと動かす。そこには大河と山脈に囲まれている神麗の地への出入りを行う数少ない手段、石畳を渡る橋の姿が見えた。

「近いとは思っていたが、本当に国境から目と鼻の先だな、この城は」

この城と国境の間に町や村は存在しない。僅かな民家は点在しているものの、基本的にはこの王城こそが神麓の地へ入るための入り口であった。途中二つの砦が設けられてはいるものの、最も堅固と認識されている国境守備隊が簡単に突破された時点で、すでに勝負はついていたと言っても過言ではない。

「国と山を守るために私達が居るのであって、国に守られるために私たちが居るわけではありませんから」

「そうは言っても簡単に王を失ったのでは話にもなるまい。そもそもこれだけ地の利を活かせる条件が整っているのだ。攻める利を考慮するならともかく、守る利だけを考えるのなら城が此処では問題だろう。民とて、王を失っては路頭に迷う」

「その時は、別の誰かが王になれば良いのです」

皇帝はこの時、彼女と対面してから初めて驚いていた。背後に立つ彼女にその表情を見られなかったのは幸運だったのかもしれないと、僅かな時を挟んで安堵の溜め息を漏らす。

「ところで」

これ以上の冷や汗を避けるためにか、皇帝は話と視点を切り替える。遠過ぎて人の姿を明確に視認することは不可能だが、岩場で何かしらの作業を行っていることは、遠目にも理解することが出来た。「あれは何をやっている？」

「採石を行っていると聞いています。文献によれば、橋を造る際に採石を行っているところで白銀の雫を見たとありましたので。同じ場所、同じ条件で採石を行えば発見出来るのではないかと、学者達は予想しているようです」

「なるほどな。まあ、それしかあるまいか」

現在帝国軍内部では、白銀の雫が一体何であるのかが一番の話題となっていた。当初、宝玉なり宝飾品なり、何かしらの象徴的な物体ではないかと予想されていたのだが、文献での資料が見つかった

にもかかわらず、そこに具体的な物体としての記述が欠けていた為に混迷の度合いを深めている。現在でも主流は宝玉のままだが、自然現象や動物といった意見まで飛び交い、完全に噂が一人歩きを始めているような状況だった。そして、それを求めて止まない皇帝自身、その結論を導き出せずにいる。あるいはこうやって悩まされていることこそが、並び立つて採石場を眺めている女王の狡猾な策なのではないかと、少しばかり疑い始めてすらいるところだ。

結局、それから三日間採石の作業は続けられたものの、白銀の雫と思しき目撃情報は得られず、その正体は再び霧深い闇の向こうに消えた。その後、残された最後の手掛かりである廃坑の探索報告からも芳しい結果は得られず、ただ時間ばかりを浪費する状況に兵士達の間にも動揺が走り始める。いつまで続けるのかという不安感が、その小さな振動を加速させ、気づけば比較的のんびりなことを構える皇帝を尻目に、下層での衝突が目立つようになってきた。

もちろん、その程度の動きを見逃すほど底の浅い皇帝であったなら、帝国領土は今頃戦火の真っ只中に没していたことだろう。彼は夕食の際前触れもなく、それでいながら突然に結婚の申し込みでもするかのような突飛さを伴って、心の内に秘めていたナイフを突きつけた。

「女王よ、そろそろ白銀の雫を見せてはくれないか？」

あまりの自然な物言いに、むしろ彼女の方が自らの記憶を探る。しかしどこにも、彼女がその所在を把握しているという情報は刻まれていなかった。夜伽でもしていたのなら、あるいは寢言という可能性もあったが、それすら有り得ない。

「……ですから、こうして毎日探して」

「最初に言ったが、其方は知っている筈だ。時間稼ぎなのか知らんが、どの道余は自らの望みを叶えるまで戻るともりはしない。そしてもちろん、いつまでも待つてやるほど悠長でもない」

穏やかな言葉が彼女の台詞を上書きする。しかしそこに宿る感情はどこまでも暗く重く、全てを奪ってきた征服者らしい闇に覆われ

て見えた。不意をつかれたこともあり、覚悟の整っていない少女の背筋を冷たい何かが駆け上る。言い訳を並べようと開きかけた口からは、何一つ音が漏れてこない。彼の放つ威圧感に、完全に吞まれてしまっていた。

「女王よ、忘れてもらっては困る。其方の最愛の者の命を、我々が握っていることをな」

その一言が、彼女を俯かせる。しかしその身から立ち昇るのは、落胆でも諦観でもなかった。

「わかりました」

やがて顔を上げた彼女の瞳はどこか遠くを見ていた。

「明朝、お見せ致します」

本来なら喜ぶべき確約に、皇帝は何故か微笑むことすら出来なかった。

早朝、夜が明けて間もなくの薄暗い階段を、十人に満たない一団が頂上へ向けて上り詰めていた。王国側は女王と二人の大臣、帝国側は皇帝と数人の近衛騎士が固めている。どちらも国家の要人ばかりではあるが、国の行く末を左右する会合としては、いささか小規模の集団であろう。

「この先に本当に白銀の雫があるのだろうか。もし我らを謀ったのなら、容赦はせぬぞ」

近衛騎士の一人から上がった脅し文句に背後から噛み付かれ、大臣二人が縮み上がる。一方約束をした当事者である女王は、時折小窓から見える朝霧のような冷たくも涼やかな表情を崩そうとしない。そこに在るのは無であり、まるで心を持たない木偶人形が歩いているかのような、そんな雰囲気すら纏って見えた。

皇帝はその背中にただならぬ覚悟を感じてはいたものの、同時にその真意を図りかねてもいた。単純に嘘を吐いて、それがいつ露呈するかと怯えているとは思えない。さりとして、彼の命を奪う機会を窺っているというのも無理があるように思えるのだ。何を狙い、何

を求め、何を企んでいるのか、その背中からはどうしても窺い知ることが出来なかった。

「さあどうぞ」

相変わらず読み取れない表情で促され、皇帝はかつて踏み入れたことのある塔の最上階へと到達する。そこはやはり、どこか地上とは違う風が吹いていて、特にこの早朝という時間は朝霧を含んでいるために少し冷たく、同時にとても柔らかい。まだ寝静まった町からは民達の寝息すら聞こえてくることはなく、まるで霧に覆われた湖の上で、簡素な小船に揺られているかのような印象すら抱かせた。ふと見下ろせば、西方の上質な絹織物にでも包まれているかのような皆が浮かんで見える。幻想的と呼ぶには極めて相応しい光景には違いない。

「それで、この景色のどこに白銀の雫はあるというのだ？」

「あちらです」

女王の指差す先、乳白色のヴェールに包まれた三角形の何かが浮かんでいる。大河に程近い遠方、しかもこの霧である。その詳細は目を凝らしてもなかなか分からない。しかし業を煮やし、その正体を問いかけてよと思った矢先、雲の切れ間から差し込んだ陽光に誘われるようなタイミングで、一陣の風が白い糸屑を洗い流していく。その、まるで世界が再構築されるような感覚に感嘆の溜め息が漏れ出ると思った刹那、帝国軍の人間全てが息を呑む。

その塔からでは三角に見えた物体、それはさながら巨大な振り子だった。それが何をする物なのか、歴戦を潜り抜けた戦士である皇帝や近衛騎士達に分からない道理はない。ましてその物体は例の採石を行った岩場のすぐ近くに設置されている。仮にこの場で否定されたとしても、投石器であることを疑う者は皆無であろう。

「あれが、白銀の雫です」

そしてどうやら、王国側も否定するつもりはないようだった。

「おのれっ、我らを謀ったな！」

「お静かに！」

腰の得物に手を伸ばす近衛隊長の動きを、女王の鋭い声が制止する。それは誰もが、王国側の人間ですら初めて耳にする女王の威圧的な叫びだった。

「ここで何か動きがあれば、即座に投石器が稼動し、橋を落とします。その後、全兵力をもつて皇帝陛下、貴方の命を奪うこととなるでしょう」

「馬鹿なっ。武器もなく我々と戦うと言うのか！」

「武器ならあります」

近衛隊長の指摘に応じて彼女が指差す先には、この塔を囲むようにして待機を完了している武装集団の姿があった。何処で調達してきたのか、全員が真新しい鎧や剣を装備している。

「……卑劣な。だが我々がこの程度で臆すると」

近衛隊長の口上は、笑いによって遮られた。全員の視線が思わず集中したその先で、皇帝が額を押さえるようにして忍び笑いを漏らしている。

「陛下？」

「やめておけ。お前がそれを抜けば余は殺される」

「しかしこのままでは！」

いきり立つ近衛隊長とは対照的に、皇帝は不自然なほど穏やかだ。「そう慌てるな。連中は余を本気で殺そうなどと思ってはおらんよ。そもそも最初からそのつもりであったなら、とうに寝首を掻いておつただろうさ。つまりそれだけ、あの男が大事なのだろうよ」

「あの男とは、一体誰の……」

「人質に決まっているだろう。余の首を取ることと同格とは、ずいぶんと大事にされていることだ」

それが少しばかり不満なのか、皇帝が何かを嘲るように鼻で笑う。「とはいえ驚いたぞ。本当にな」

たった一瞬で飢えた狼を思わせる空気を纏った彼は、その鋭くも真剣な眼差しを女王へと向ける。その瞳に宿る輝きは、この国に侵攻する前とも、女王と出会った直後とも、そして昨日とも違ってい

る。熱く、そしてどこか柔らかい、興味と感心に溢れた輝きを放っていた。

「こんなにも特定の女が欲しいと思ったのは、生まれて初めてかもしれんな」

そんな呟きを漏らし、更に続ける。

「女王よ、改めて問う。余の后きさきにならんか？」

「へ、陛下！」

あまりに突然の提案に、部下の方が狼狽する。

「丁重にお断り申し上げます、陛下」

あまりにも明確な拒絶の意に、皇帝が再び笑い出す。

「そうであるうな。案ずるな。無理矢理に連れ去るようなことはせんよ。第一、そんなことをしようとするれば、そこから飛び降りるつもりであるう？」

「はい」

躊躇なく女王は頷く。

「陛下、今はそんな問答をしている時ではありません。とにかくここから脱出するためには、女王を人質に取ってでも」

「その必要がないと、まだわからないのか」

「は？」

近衛隊長が口を開け放つ。この危機的状況に、皇帝は覇気どころか緊張感すら纏っているように見えなかった。あるいは、皇帝は本当に女王によって腑抜けにされたのだらうかなどと、飛躍した発想にまで行き着いたほどである。

しかしもちろん、皇帝は正気そのものだった。

「神籠の女王は約束を守っただけだ。いささか過剰な演出が付加されているように見受けられるがね」

「約束、ですか？」

「よく考えてもみる。たった一晚であれだけ大きな投石器を用意することの意味を。山賊討伐で砦を建てる際に使用した丸太を大河で運び、あらかじめ採石しておいた場所で組み上げる。そればかりか

廃坑に残しておいた鉱物や廃材を利用して用意した武器まで行き渡らせる周到ぶり、恐れ入るわ」

「だからこそ、この場を何とか」

「わからぬか？ これこそが白銀の雫そのものだ」

近衛隊長を始めとする面々は、互いに顔を見合わせて困惑している。

「自分の国のために昼夜を問わず働くその精神力、これだけの作業をこの短期間に終わらせる技術と体力、白銀の雫とは良く言ったものだ。それは彼らの流す汗、なのだな？」

「国というのは民の為にこそあるべきものです。皆、私の為に働いたではありません。自分のため、自分の大切なもののために働いてくれるのです。それがこの国の宝、すなわち白銀の雫です」

「そうだな、そうかもしれない」

皇帝は頷き、一つ小さく息を吐いて踵を返す。

「帰るぞ。我が祖国へな」

近衛騎士達を引き連れ、皇帝は階段へと足を向けた。と、その歩みが三歩進んだところで停止する。

「そうそう、良いものを見せて貰った礼だ。あの強情な騎士は丁重にお返しさせていただくことにしよう。それと、余は諦めが悪いのでな。またいずれ立ち寄らせてもらうことにするよ」

その言葉に初めて、女王が歳相応の安堵を表情に滲ませた。安心したら突然に恐怖が込み上げたのか、身体の芯が震え始める。それに呼応するように、熱くなった頬の奥から溢れた涙が、ようやく輪郭を取り戻しつつある世界を崩していく。

「こんな時に申し訳ございませんが、皆に作戦成功の報告を」

「そ、そうですね。大丈夫、少しホツとしただけですから」

表情を引き締め、砕けつつあった脚腰に力をこめる。そのまま縁に手をかけ、塔を囲んでいる面々に向かって大きく手を振った。その時、弾けるように目を離れた一粒の雫が、生まれたばかりの朝日を浴びて大きく輝く。

歓呼の聲が、一つの単語を紡ぎ出す。  
白銀の雫、と。

秘宝とは、秘匿されてこそ価値の生まれるものなり。

(後書き)

次の投稿作も仮面舞踏会絡みとなります。

まあ『らしくない』作品が並ぶことになりそうですが、そんな月もあるってことで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9886p/>

---

白銀の雫

2011年1月6日13時55分発行